

公衆衛生

牛の中皮腫の一例

○亀田真吾¹⁾ 大久保光晴²⁾ 山本直樹¹⁾

1) 島根県食肉衛生検査所 2) 島根県益田家畜保健衛生所

1. **はじめに：**牛の腹膜に見られる腫瘍には、中皮腫、線維肉腫、脂肪腫および脂肪肉腫などがあり、また、腹腔内に播種を生じる腫瘍としては卵巣の顆粒膜細胞腫、胃の平滑筋肉腫などが知られている。今回、稀だとされるリンパ節への転移が見られた悪性腹膜中皮腫(上皮型)の一症例について、その概要を報告する。
2. **材料と方法：**当該症例は黒毛和種、183ヶ月齢の雌牛で、平成30年9月に食欲低下及び排便少量を呈し、家畜診療所より脂肪壊死症と診断され、病畜搬入された。解体後検査により腹腔内に多数の腫瘤が確認されたため多発性腫瘍の疑いで保留とし、病理学的検査を行った。採取した組織を定法に従ってパラフィン切片とし、ヘマトキシリン・エオジン染色(HE染色)、PAS染色、トルイジン青染色(大野法 pH2.5、pH4.1)および免疫染色(抗ケラチン・サイトケラチン AE1/AE3抗体および抗ビメンチン抗体)を実施し、鏡検を行った。また、血液を使用してリアルタイムPCRによる牛白血病ウイルスDNAの検出も行った。
3. **結果：**HE染色の結果、腹腔内腫瘤の大部分は境界明瞭で腹腔臓器漿膜面及び腹腔壁の臓側面に限局していた。しかし、横隔膜では筋組織との境界不明瞭な部位、肝臓では実質への浸潤と思われる像、内腸骨リンパ節には辺縁洞への転移と思われる像が見られた。腫瘍組織は樹枝状に走行する結合組織によって不規則に分画され、類円形～円形で核小体が明瞭かつ好酸性の細胞質を持つ腫瘍細胞が、多数の管状構造及び少数の乳頭様もしくは蜂巢様構造を形成しており、分裂像や壊死像も認められた。またPAS染色に一部陽性、トルイジン青染色(pH4.1)にて間質がメタクロマジー陽性を示し、同染色(pH2.5)では陰性化が見られた。免疫染色では抗ケラチン・サイトケラチン抗体及び抗ビメンチン抗体の両者に陽性を示した。組織像、血液検査及びリアルタイムPCRの結果から牛白血病は否定され、以上の結果から悪性腹膜中皮腫(上皮型)と診断した。
4. **考察：**肝臓実質に浸潤した腫瘍細胞は抗ビメンチン抗体に陰性を示したが、これは上皮型中皮腫への分化がより進んだためと考えられた。内腸骨リンパ節への転移像は血行性あるいはリンパ行性に腫瘍細胞が転移したものと考えられた。